
異世界で無双だぜッ！

優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で無双だぜッ！

【Nコード】

N2138P

【作者名】

優希

【あらすじ】

トラックにはねられて死んだ主人公がネギま！の世界で無双するお話。処女作なのでいたらないところが、あると思いますが、出来たら読んでください。あと、原作キャラが崩壊してるかもしれません

W

第00万 プロローグだぜッ！（前書き）

読み専からの脱出

第00刀 プロローグだぜッ！

突然で悪いんだけどさ、今死にかけてるんだよね。

うーん、死にかけてるってのじゃ語弊があるな。今の状況を説明すると、幼稚園児をかかえた俺の前には大型トラックが迫って来ててはねられる直前なんだよね。ボール追いかけて道路に飛び出した幼稚園児がいたから、思わず飛び出しちゃったけど。運転手寝てるっぽいし、助からねーだろうなー。この幼稚園児だけでも助からねーかなー。とか考えながらもさっきから走馬灯チックなのが頭に流れてるし。あ、やべえ、ぶつかる……

……い……て……

……あ、あ……意……し……き、が……

「…………知らない天井だ」目を覚ましたら、うん、知らない天井だったね。真っ白だから病院かとも思ったけど、回りに何もなし、第一俺自身ベッドに寝てないからね。上下左右前後360度真っ白で、何処までも続いてそうだから、天井ないのかも……。どーでもいいけど。

「気が付いたか？」

「うひゃ！え？え？」

どこからともなく声が聞こえてきたから、ビビって変な声出しちまったじゃねーか、このやるー！

「…だ、誰っスか？」

「君を此処に喚んだ者だよ」

何か知らんが俺は喚ばれたらしい。てか、どこから声聞こえてるんだろ。まあ、どーでもいいけど。

「君には異世界に行つてめらいたくて、喚ばせてもらったのだが」あれ？これって所謂転生つてやつなのではないでしょうか！あ、でもその前に

「あの、俺って死んじやったんですか？」

やっぱりこれが一番気になる。恐らく死んでいるんだろうけど聞いておきたかった。

「死んでおる。トラックにはねられて、骨が折れ、内臓に刺さり、大量出血で死んだ。幸いにも君がかかえていた園児は無事だったようだがな。」

「そうっすか……」

あーあ、俺死んじまったのか。ま、あの幼稚園児は助かったようだしよしとするか。第二の人生も得られるっばいし。

「で、どこにいくんですか？」

「……珍しいな。普通はもっと取り乱すのだが……」

「諦めが良いだけですよ。で、どこなんです？」
終わった事にグダグダ言ってもしょうがないしね。

「なるほど。悪くない考え方だ。君の行く所は『魔法先生ネギま!』の世界だ」

「え？あの漫画の？」

「そうだ。あの世界の人間が君の世界に入ってしまったてね。その入った瞬間に死んでしまったのが君でね。つまり、交換という事だよ」

なるほどプラス1したからマイナス1しなくてはいけないって話か。まあ、魔法が使える世界に行けるんだ。そいつには感謝しとこう。

「あと、特殊能力を五つ渡して良い事になっている。何か欲しい力はあるか？」

うひょーい！きたきた、待ってました！！何にしようかな！実用的なのが良さそうかなー、うーん。

……………よし、この五つに決めた。

「天上天下の屍家の能力とあらゆる武器を扱える能力、不老の肉体、無限の魔力、無限の氣を下さい」

これで、無双できるはず！！

「いいだろう。その五つで間違いないな？」

「はい」

「わかった」

「ッ！」

突然の頭痛。今まで経験した事の無い頭の中に何か入り込んでくる感覚。5分にも10分にも感じられる時間が過ぎた頃に頭痛は収まった。

「能力は与え終わった。能力によって、姿が変わったがたいした問題では無いだろう。自分の姿は後で確認してくれ」

「姿が変わった？」

「ああ、前よりも格好よくなっているぞ」ビビった！。人間の貌してないのかと思っちまったぜ。しかも、かつこ良くなってるとか。ナイスだぜ！

「そろそろ送る時間だ」

もう時間がきちゃったらしい。時間軸がいつ頃なのかはわからないけど、いっちょ無双してきます！

「では、送るぞ」

「はい。縁があつたらまた会いましょう」

戲言な感じで別れの挨拶をした途端俺の意識は深い闇に包まれていった……………。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

第01刀 能力確認だぜッ！

「……知らないてんじ、…知らない空だ」

はい、皆さん。おはようございます。

二回目の「知らない天井だ」いけるかと思ったら天井とか無くて、綺麗な蒼色をした空でした。まったく。あの能力くれた変な人（声？）ってばひどいなー。まだ15歳にもなっていない少年を森に放置とか。まあ、あの能力くれた変な人（声？）（以下神様と呼ぶことにする）もやんごとなき事情があったに違いない。うん、そうに違いない。とか考えながら自己簡潔させる。

改めて辺りを見回すと、もう木、木、木、きつとこういう場所の事を森って表現するんだろうね！THE・現代人やってた俺には、全く縁の無い場所だったんだけどなー。まあ、いいや。現状確認し終わったし、受け取った能力の確認しよう。丁度かなり深い森のようだし修行にはもってこいでしょ。あの頭痛の時に能力付与出来てなかったとかいう落ちは無いだろうし。まあいっちゃってみますか！

あ、服はちゃんと来てたよ？普通のジーパンと黒のシャツ、あと下

着だけだったけどね。

とりあえず魔力、氣を確認してみようか。前の世界では持つて無かったから感覚が掴みづらいかもしれないけど、御都合主義がなんとかしてくれるしょ。

定番の目を瞑って精神統一的な事をしてみる。

……

……

……

……

…… あ、あつた。何か、体の中に日本の流れがあるぞ。ビバ御都合主義！とりあえず体全体に纏わしてみようか。

…… うん、出来たね。何か両方同時にやったら出来たっぽい。あれ？これが咸卦法というやつなのでは？

まあ、いいか。流れが太く、すごい勢いでながれてるから、無限の魔力と氣はあるんだろう、きっと。不老の体は現時点で確認方法がわからないから保留。

次に異能タイプの能力だね。まず屍の方の能力の方からいこうか。

屍の能力は匂いを氣で繋いで物質を創ることである。匂いは嗅覚に

よって感じられ、五感というものは一つ取り除かれると他の五感の感度があがるとされる。盲目の人が耳が良かったりするのはそのためだ。

目を瞑って視覚を取り除く

気分的なものかも知れないが瞑る前よりも鼻が聞いている気がする。

匂いの鎖を感じる

実体の無い匂いを有るものとして認識する。

氣で匂いの鎖を結合する

視界は無いので想像する。覆いつくすような刀剣。

目を開けた。

自分を護るように展開されている刀剣は壮観だった。発射するのも躊躇われるほどに美しかった。

しかし、まだコントロール出来ていないようで刀剣が発射される。制御を失った刀剣達は無差別にそこら中の木を斬り倒していく。何十もの刀剣が切る役目が終わり地面に突き刺さった。その振動に軽くよろけるが、難なく体勢を立て直す。刀剣が地面に突き刺さった事により立っていた砂煙が晴れてくる。

「うひゃー。綺麗になったなー」

思わず呟いてしまった。俺の周り半径100mくらいは何にも無かった。いや、切り株はいっぱいあったけどね。

刀剣は『消える』と念じたら消えてくれた。屍の能力は使い勝手はいいようだ。満足満足。

では最後の一つも確認しとくかね。

目を瞑る。息を吸って体に合うサイズの剣を一つ匂いを結合して創った。目を開けて、宙に浮いている剣を手取る。その瞬間、まるで昔から使っていたかのように扱い方がわかった。剣を振ってみるとまるで、手足のようだった。

「いえい！チート万歳！！」

叫んだよ。叫んだともさ。いくぜ！こっからが俺のスーパー無双タイムの始まりだぜ！！！！

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

第02刀 修行だぜッ！

能力も確認したし、スーパー無双タイム始めようと思ったんだけどさ、不老だけど不死じゃないんだよね。

せっかく転生したんだからすぐには死にたくないよね？普通は。だからもう少し戦えるようになってからスーパー無双タイムに入ろうと思う。

幸いにもこの屍の能力は想像できる範囲内で物が創れるらしい。さつきから色々創ってみてるが、布や糸まで造れてる。すごいね屍。とりあえずさっきの能力確認の時に服が破れちゃったから服を創ってみようかな。今から修行だし動きやすい服装が良いよね。うーんよし、…結合。うん、良い感じに出来た。少し氣を多めにこめれば半永久的に具現し続けるみたい。真っ黒の七分丈のズボンに真っ白の半袖シャツにしたんだけどね。

原作は一回流し読みしただけだからあんま覚えてないしなー。主要キャラとか、大まかなストーリーは覚えてるんだけどね……。チート転生したならやっぱ原作介入はしたいしなー。『紅き翼』^{アラルブラ}に入ると介入したときのネギがウザそうだから、つくならテオドラの方かな？テオドラ可愛いし。運が良かったら『仮契約』^{バクティオー}出来るかもしれないしね。転生者の勘か何か知らないけど、何か今が『紅き翼』^{アラルブラ}の出来る10年前な気がすんだよね。まだまだ余裕はある。ちまちま頑張っていけますか！！

あれから10年経った。

この10年で変わった事といえば、俺が屍の能力を完璧に制御出来るようになった事、目を毎回瞑るのが面倒だったから目の位置に包帯を巻くようになった事。刀剣の乱舞、双剣、刀、槍、拳にそれぞれ12種の技が出来た。俺なりに実戦を考えた技だけど、これからの実戦でさらなる改良を加えて行こうと思う。後は、168cmという低身長にしては大分筋肉がついた。まあ見た目は全然と言っていいほど変わらないんだけど……。畜生！少しは成長して欲しかったぜ！

まあ、技の方は後々見せていくとしてこんなもんな？変わったところは。

修行中の飯とかは森にいた動物達を頂いた。いつの間にか何故か森の生態系の頂点にいたんだけどね！まあ、気にしない方向で。俺がいなくなったらいなくなっただ、また新しい生態系が出来るだろう。勝手にやってくれて感じてだな。

あと包帯で目を隠し始める前に鏡で見た顔はかなりのナイスガイでした！やばかったね、ハーレム形成しちゃいそうなくらいナイスガイだったしね。説明するとだね、肩にかからない程度のさらさらの茶髪。キリツとしたややつり目気味の目（今は隠れちゃってるけどね）、少し高めの綺麗な鼻、そして男とは珍しいシミ一つ無いスベスベの肌。

大事な事なので何度でも言います。まじでナイスガイでした！

まあ、中身俺だからモテないだろうけどね……。やべ、自分で言うって悲しくなってきた。いや、これ泣じゃねーし、包帯濡れてるとか幻覚だから！

じゃ、ま、とりあえずテオドラマ指してLet's GO!!!

t o b e c o n t i n u e

第03刀 原作介入だぜッ！（前書き）

随分な駄作に仕上がりましたww

良ければ読んでください

第03刀 原作介入だぜツ！

はい、こんにちは。

前回テオドラのとこに行く事は決めたけど、どうやって接触しようか？実質あまり権力無いって言っても第三皇女なんだから、パツと出の俺なんかが会うのは難しいんじゃないだろうか、いや難しいに違いない。反語。

やべー。もう躓いちやったよ。これ『紅き翼』アラルブラに入るしか無いのかな？でも、入ったら麻帆良でめんど臭そうだしなあ。あと俺、英雄とかそんなガラじゃないし。

前世ではバリバリゲーム、ラノベ、アニメやってたしね。男子校だったから女の子成分が欲しかったんだよ、うん。他の奴らもやってたし、オタクじゃないよ、普通だったんだよ！いやまじで。

刀剣創れるから *f a t e* っぽく宝具創れるかなと思ったら、できなかったね。宝具の形は真似して創れたけど能力はつけられなかった。でも諦めないぜ！俺はいつか成し遂げてみせる！

てな訳で、『紅き翼』アラルブラ側から原作介入することにしよう。『紅き翼』アラルブラ

側でもテオドラ会えるしね。少し会うの遅いけど、それまで我慢だ。あ、でも顔はちゃんと隠しとこ。目を包帯で隠してるとか特徴的すぎるから後ですぐ誰か分かつちゃうもんな。よし、結合。

真っ黒のローブを作成。鼻の頭まで隠れるフード付きだから安心仕

様です。魔法まだ覚えてないから何も出来ないけど、肉弾戦で十分
いけると思う。何故魔法の練習をしてなかったかと言うと、原作す
ら曖昧なのに魔法の詠唱とか覚えてるはず無いでしょ？『紅き翼^{アラルブラ}』
に入ったらゼクト辺りに教えてもらおうでしょう。

10年間お世話になった森を出て、森に向かってとりあえず一言。

「今までありがとうございました」

何だかんだ大量に自然破壊しちゃったし、誰かの私有地だったかも
知れなかったからとりあえず言ってみた。よし、原作介入と行きま
すかね。

出てきたのは良いけど、戦争激しすぎ。何処行っても服装が怪しい
から相手側のスパイだと思われて攻撃される。本当にスパイならこ
んな格好する訳ないだろうに…。
まあ、全部撃退してるけどね。

それで、今は丁度近くで起きている紛争が見渡せる高台まで来たんだけどさ、ナギ達いない。『紅き翼^{アラルフラ}』側ですら介入出来ないの？まじで勘弁してくれよ……。もういいや、この鬱憤はここで晴らしていこう。丁度人も一杯いるみたいだしね。

「憂さ晴らしのために死んでくれ」

誰にも聞こえないように一回言ってみたかったセリフを言う。金輪際言っ事はないだろうけどね。それじゃ、行くぜ！

とりあえず、1000くらいとこう。

結合。

考えてから、発動までのタイムラグ僅か、零コンマ零零二秒。発動し、零コンマ零零一秒で発射する。

そして、零コンマ零零二秒で突き刺さる。

思考から着弾（着刀？）まで僅か零コンマ零零五秒。

まさに、瞬間である。

刀剣が突き刺さった連合軍、帝国軍共に何が起こったか理解出来ない。理解する程の時間を与えられず、殺されたからである。

「まだまだいるなあ。『解』！」

瞬間、あらゆる場所に突き刺さった刀剣が爆発した。結合した匂いという素粒子が飛び散ったのだ。

ここまで来てようやく連合軍、帝国軍共に理解した。今俺達は攻撃されていたんだ、と。

「よっしゃ、もう一回いくぜ!!」

相手に聞こえるように叫ぶ。まるで自分の存在を知らせるように。

また刀剣が創られる。

発射され、そして突き刺さり、爆発する。

その繰り返しによって、両軍共にどんどん消し飛んでいく。

「やべー、まじで人がゴミのようなんですけど」

とか呟いてたら、いきなり巨大な雷が飛んできた。咄嗟に剣を創り、切り裂く。

「あぶなっ！いきなり誰だよ!!」

「てめえの方が誰だよ!!」

喋りながら、雷が飛んできた方を向くと、いたよ！ようやく見つけましたよ！ナギ・スプリングフィールドを！ついに原作介入の糸口が見つかった！やばい、嬉しすぎて涙が出そうだね。

「何だ？お前泣いてんのか？」

「え？」

頬を触ってみる。あ、嬉しすぎて本当に涙が出てたらしい。包帯から滴るほど泣くとか、恥ずかしいから急いで拭き取った。

「お前、名前は何だ？」

「教えたくない。好きじゃないんだ、自分の名前は」

変な名前だったし、嫌いだったから教えなくなかったのだよ。

「何だそりゃ」

ナギと話していると、『紅き翼^{アラルブラ}』の面々がやって来た。まだ仲間は近衛詠春、アルビレオ・イマ、フィリウス・ゼクトの3人しかないな

かったけどね。

「何で戦争に手を出した？」

「苛ついてたから、憂さ晴らしのために」

咄嗟に言い訳が思い付かなかった。あんま、良い理由じゃないよな。まあ事実なんだけど。

「何か目的はあるんですか？」

アルビレオ・イマが聞いてくる。

「いや、ないけど」

「じゃあ俺らについてこい！」

「別にいいよ」

やったー！ナギから誘ってくれるなんて願ったり叶ったりだ。これで原作介入だぜ！！

ナギが他の仲間から白い目で見られてるけど気にしない、気にしない。

「仲間にするのは良いが、せめて顔を見せてもらいたいな」

と詠春。あ、そういえばフード被りっぱなしだったわ。まあ一回く
らいなら良いだろう。『紅き翼』アラルブラに入れなかったら元も子もないし、
とフードを外す。

「その包帯は何だ？」

「あー、これは能力のためにつけてんの。まあ、無くてもいいけど、
有った方がいからさ」

ナギが「ふーん」と興味無さげに返事を返してきた。お前が聞いた
んだろうがコノヤロウ。

てな訳で無事に『紅き翼』アラルブラの仲間になることが出来ました。いえー
い。

side ナギ・スプリングフィールド

よう、ネギ・スプリングフィールドだ。

近くで紛争が起こったらしいから、止めに行こうとして、現場に近づいたんだ。

そしたらよ、両軍ほぼ壊滅なんだよ！

びつくりせずにいられるかってんだ。さっきまでは、争ってたはずなんだぜ？

その瞬間何かが降ってきて、そして爆発した。は？もしかして何かの第三戦力とか出来ちゃったのか？全く意味がわからねえ。

回りにいる仲間達に、アイコンタクトで聞くんが、こいつらもわけがわからんらしいし。

よく見えなかったが、何かが降ってきた方を向くと、真っ黒なフィードを鼻先まで被った怪しいやつがいた。

この攻撃は十中八九あいつの仕業だろう。

おもしれえ。とりあえず一発いっとくか！

「百重千重と重なりて走れよ稲妻『千の雷』キリブル・アストラバー！！！」

いつも通りにアンチヨコを見ながら呪文を唱える。そして、唱えた瞬間に俺自身もソイツに飛んでいく。まだ気づいてねえみたいだし当たるだろうと思ってたが当たらなかった。

いや、当たったのか？

右手に出てきた剣で魔法を斬りやがった。なんて野郎だ！詠春でも斬れないってのに！

「あぶなっ！いきなり誰だよ！」

「てめえの方が誰だよ！！」

いきなり戦争に手を出しやがって、まじで誰だよ！

あれ？こいつ泣いてないか？今から喧嘩するかも知れねーのに泣くなよ。涙とか見たくねーってのに。

「何だ？お前泣いてんのか？」

「え？」

どうやら無意識に泣いてらしい。

「お前、名前は何だ？」

「教えたくない。好きじゃないんだ、自分の名前は」

「何だそりゃ」

母ちゃん、父ちゃんから貰った名前を嫌いとか珍しいやつもいるもんだな……。

ここまできて、ようやくアル達が追いついてきた。

「何で戦争に手を出した？」

「苛ついてたから、憂さ晴らしのために」

ようやく、状況を理解したアルがソイツに質問した。
よし！俺はコイツが気に入ったぞ！仲間にしよう！

「じゃあ俺らについてこい！」

仲間から白い目で見られてるけど気にしない。

「別にいいよ」

これで仲間がまた一人増えたぜ！！

「仲間にするのは良いが、せめて顔を見せてもらいたい」

そういえば、そうだな。仲間になったんだし、顔くらい見ないとな！
少し固まってからソイツがフードを外した。目に包帯を巻いている
が、十二分にかっこよさが伝わってくるイケメンだった。なんで包
帯巻いてるんだろうな？聞いてみるか。

「その包帯は何だ？」

「あー、これは能力のためにつけてんの。まあ、無くてもいいけど、
有った方がいいからさ」

「ふーん」

能力ってさっきのやつかな？すげー能力だったな、アレ。まあどう
でもいいか。今度喧嘩する事があればその時ちゃんと見ればいいや。

「『^{アラルブラ}紅き翼』へようこそ。俺らは君を歓迎するぜ！俺の名前はナギ・
スプリングフィールド」

「近衛詠春です。よろしく願います」

「アルビレオ・イマです。よろしくお願いしますね」

「フィリウス・ゼクトじゃ。よろしく頼むぞ」

と皆も自己紹介をしている。コイツ自分の名前嫌いとか言ってたけど何て呼ぼうか？と考えていたら。

「そうだな。それじゃあ俺の事は妙雲って呼んでくれ」

「おう！これからよろしくな。妙雲！」

こうして妙雲は俺らの仲間になった。

s i d e o u t

やつほー。妙雲です。何故妙雲という名前にしたのかは天上天下をみればわかると思うよ。

今は何か知らないけど最初に修行した森で詠春が鍋料理を振る舞ってくれるらしい。なぜこの森なのか、というツツコミはなしだぜ！そつえばこの辺でラカンが出てきた気がする。まあ、なんとかなるだろう。

詠春が鍋に食材を入れはじめてから数分、ナギが肉を入れ始める。

「じゃ、早速肉を」

「ナギ！おまつ……、何で肉を先に入れてるんだよ！」

鍋料理というものは、火の通る時間差があり、野菜などから入れないと肉が固くなってしまうのである。多分。

なので詠春が怒っているんだろう。

ゼクトが、トカゲ肉でも旨いのかのう？とか言ってるけど、この肉ってトカゲの肉なの？

元日本人としては、は虫類の肉はあまり食べたくないんだけど…。

「バツ、バカ！火の通る時間差というものがあってだな」

「あー、うつせーぞ！えーしゅん」

詠春がグダグダ言ってるけどナギのあほは止まらない。どんまい、詠春。

「妙雲！傍観してないで、ナギを止めてくれよ！」

詠春からのヘルプが入ったけど無視無視。

「フフ……、詠春。知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋將軍』……と呼び習わすそうですね」

あれ？奉行じゃなかったっけ？將軍でいいんだっけ？
ナギ達は、ナベ・シヨーゲン！？めちゃくちゃ強そうじゃね！的な事を話している。

「わかったよ…詠春。俺の敗けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す。好きにするが良い」

と、ナギとゼクトから『鍋將軍』に任命されていた。
詠春が、鍋奉行じゃ……？とか言ってるから、やっぱり奉行だった

らしい。

「おお、何じゃこのソース、上手いぞ？」

「ホントだ！うめえっ！？」

ゼクトの発言にナギが同意する。

「これが日本の誇る醤油だよ。大豆からつくられてるんだぜ。あと大根おろし」

俺が説明をする。

「これが醤油か！スゲエうめえっ！？」

「ナギ、お前には日本に来た時寿司食ったろ」

うまいなら忘れんなよ…。

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

姫子ちゃん？誰だっけ？

「姫子ちゃ……？ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

「姫子って誰？」

口を挟んだ。

「ああ、妙雲は知りませんでしたね。ウェスペルタィアの王女の妹の事ですよ」

ああ、明日菜の事か。なるほどなるほど。

「ああ、あの魔法無効マジックキャンセルのあの娘ね」

そこで詠春が違う話題を切り出した。

「その戦だが……、やはりどうにも不自然に思えてならん」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが、鳥頭」

あと、肉ばっか喰ってるナギに少し怒ってる。

次の瞬間ナギの後ろの崖から大剣がとんでくる。

が、俺が素早く剣を創り出し、大剣に向けて発射。とんできた大剣を易々と貫き、大剣を投げたと思われる人物の足下にあたり崖が崩れ、大男が落ちてくる。

落ちてきた岩の衝撃で鍋がひっくり返ったが、アルとゼクトとナギが、肉だけを器用に集めていた。

ひっくり返った鍋は、やはり原作通り詠春の頭に乗っかっている。

「食事中失礼〜〜ッ！！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！」

少し間を開けて「いっちょやろうぜッ！！」と言ってきた。

崖から落ちたのに怪我一つしないとか、原作通りバグキャラだな。あと、落ちてきた癖に落ちた事実をスルーしてやがる。なかなかやりおる。

「なんじゃ？あのバカは」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。えいしゅ……むお!？」

「フ……フフフ……。フ……食べ物を粗末にする者は……」

「あ、詠春が壊れた」

突然立ち上がる詠春。俺は黙って詠春に刀を渡してやる。

「どーしたー!来ねーのかぁー!!来ねーならこっちからいッ……」

ラカンの持っていた大剣が真っ二つにされる。

「斬る!」

ラカンが「おほ（はーと）」とか言ってるけど、大男が（はーと）とかキモいだけだっつーの。

「お?詠春の攻撃凌いでるぜ」

「あの大男やりますよ。見たことがあります。ちょっと前、南で話題になった剣闘士ですよ」

ナギとアルが肉を食いながら話している間にも、105合程切り結んでいる。何でわかるの？って疑問に答えると、何か感じるんだよね。きつと10年も視覚を無くすとわかるようになるんだよ。

「ちよっ、タンマタンマ。あんたマジでつええな！！ちよい待たね！？」

「ふざけるなっ！！やる気なら本気を出せ貴様ツ！！」

まあ生真面目詠春ならキレるよな。

「ヘッ、ソースか。けど4対1だし本気を出す訳にはいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ！？」

そう言いながらラカンは懷からカプセル型の魔法具を取り出した。そして、詠春に向かって投げた。すると、森の精、火の精、風の精、水の精の形をした半人半霊の存在者が呼び出された。森、火、風の精型の者は揃いも揃って巨乳なのに対して、水の精型の者は貧乳だった。頭のカチューシャについているタグの通り、詠春がロリコンだった場合の保険なのだろう。ここまで冷静に解説したけど、正直詠春に、殺意がわいてくる。妻いるくせにデレデレしやがって！！

こっちは前世で死んだ時、中3だったから生乳搾んだ事無いって言うのに！！くそう！！

「情報その1。生真面目剣士はお色気に弱い」

詠春が森、風の精型の者の生乳に挟まれていやがる。くそう！！羨ましい！！

「くっ……卑劣な！！いや、何のこれしき心頭滅却すれば火もまた
」

言葉の途中で、ラカンが呼び出した狸の置物を、頭にぶつけられていた。ざまあみる詠春！！

「フ、ホイー丁あがり」

何でラカンは勝ち誇った顔してんだろ。少しイラッと来ちゃったね。次は俺が行くかな？

「次は俺が行くわ」

「おう、任した」

「任された」

ナギに許可を得て、ラカンにとりあえず一発剣を発射しといた。その隙に詠春を回収、そして近くにいたゼクトに投げ渡す。

「次は俺が相手だ」

「おう！！出たな、情報その4。鼻まで隠れる真つ黒のローブを被った魔剣士は弱点不明。特徴最強」

あれ？何で俺の情報漏れてるんだろ？戦の時は目立たないように戦ってるんだけど。もしかして、目立ってたのか？

「少し違うが奇遇だな、小僧。俺も南じゃ無敵と滅却噂の男だ」

最強と無敵じゃかなり違う気がするけど、アホに何言っても意味無いだろうからスルーの方向で。

「おい、アホ。剣無しで良いのか？」

「心配すんな。俺は素手のが強え」

そうか、なら少し本気を出そうかな。
結合。一番初めに能力を使った時のように俺を護るように展開された刀剣達。今は全てを制御できるようになった。

「じゃあ、いくぜ？」

「ちょい待った。もう半分ぐらいになったりしないかなーとか思うんだけど」

するわけ無いだろう、アホめ。

「しねーよ、いけ!!」

刀剣達に進むように命令を下す。あれくらいなら、ラカン^{ラカン}は避けてくれるだろう。あれ？何か当たってるんだけど。やばい、ラカンが動かない。大分手加減したけど死んじゃってるかも……。

急いで近寄って、最近ゼクトから習った回復魔法をかけてやる。

ゼクトへの弟子入りに関しては、魔法を知らないと言ったら普通に

教えてくれた。『千の雷』キラブル・アストラペーくらいなら楽にいけるようになった。攻

撃魔法を重視してたから、回復は最近習ったばかりなんだけどね。回復魔法を掛け終わり、足を引っ張りながらナギ達のいる方に引きずっていく。体でかいから、重いなこのアホ。

連れていき、相談したところこのまま放置はかわいそうだから、起きるまで待つとの事。

それから3時間。

ラカンが起きた。ラカンが起きるまで、俺はずっと森の精型の者と、遊んでただけだね。もちろん性的な意味じゃないよ。14歳っていったらダメって言われたんだよ。俺って、体の年齢は14歳なんだけど、精神年齢は25なのね。まあ、いつか機会があるでしょう。14歳っていったらナギ達驚いてたけど何でだろう？

まあ、それは置いて、起きて直ぐに、ナギとラカンが、何が原因か知らないけど喧嘩をし始めて、原作通り13時間喧嘩をした。結果また、この森の自然を奪ってしまったのでした。

しばらくしたら、何か知らんがいつの間にかラカンが仲間になっていたとさ。

あ、この後でちゃんと森に、ごめんなさいって言っというた。

t o b e c o n t i n u e

第04刀 本気だぜッ！（前書き）

遅れてすいません。

大分前に書いたやつ何ですが、あまりの酷さに驚きましたw

第04刀 本気だぜッ！

はい、妙雲です。こんにちは。

最近、本格的な帝国の侵攻が始まってきた。どうやら、ただの侵攻ではなく、真の狙いがあったらしいのだ。彼らは古き民の文明発祥の聖地『オスティア』の奪還だったのである。ててん。

という訳で、現在何かヘラス帝国の大規模転移魔法の実戦投入によって、連合の喉元である全長三百キロに亘って屹立する巨大要塞グレートブリッジを攻撃されているらしく、俺達『紅き翼』アラルブラは助けに行くんだと。喉元ならちゃんとガードしとけて話何だけどな。まあ、俺の情報漏れているのがラカンによって分かったから、遠慮せずに戦えるからいいんだけどさ。アルギユレーの辺境に居ただけど、そこからグレートブリッジまで遠すぎ。結構時間かかったよ。

「よし！今から最前線行って大活躍すんぞ！」

「なあナギ、本気でやっていいんだよな？」

が戦艦を乗り移りながら、一隻ずつ落としていつてる。

「みーんなー！！避けるよー！！！！」

忠告しといたから、大丈夫だろ。残りの刀剣達よ、いけ。
ものすごい破壊音をがしてる。耳の鼓膜が破れそうだ。

「『解』」

さらに爆音がプラスされた。しばらく耳がキーンとするんじゃない？
とか考えてたら、ナギ達から怒声がとんできた。うるさいなあ、今
耳がキーンってしかけてるのに。

「殺す気かッ！！このアホが！！」

俺以外の『紅き翼』^{アラルブラ}の総意らしいので謝しておく。

「すまん！！悪かったー！！」

遠いから声を張り上げてるのもあるんだろうけど、埃が喉に入っ
てきて、喉が痛い。泣ける。ぐすん。

おー、戦艦と鬼神兵がそれぞれ、最初から8割、10割消えたな。
まあ鬼神兵は今いるのは全部ブツ飛ばせたようだな。満足満足。あ

とは、詠春の神鳴流を見ながら、練習してみるか。

あれ？詠春もう戦ってないんだけど。

「詠春。もう戦わないの？」

「ああ、妙雲が大体倒してくれたから、もう大丈夫だろう。後はナギ達が出来てくれるだろう」

あーちくしょう！ハツチャケすぎだよ、俺！神鳴流見たかったのに！

「えー、マジかよ。神鳴流覚えようと思ったのに」

「覚えるって……。そんなに簡単な流派じゃないぞ。覚えたいなら今度教えてやるう」

教えてくれるんだと。前の世界みたいに平和じゃ無いから、手段は持てるだけ持ったときたいんだよね。

「頼むよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2138p/>

異世界で無双だぜッ！

2011年2月24日02時30分発行